



# 土鈴で楽しむ

# 上方落語

海老天たまこの落語土鈴



## 目次

ページ

1	はじめに		1
2	土鈴とは		1
3	作者紹介		1
4	落語土鈴		
	第1噺	看板のピン	2
	第2噺	頭山	2
	第3噺	牛ほめ	3
	第4噺	鷺取り	3
	第5噺	池田の猪買い	4
	第6噺	蛇含草	4
	第7噺	蛸芝居	5
	第8噺	首提灯	5
	第9噺	高津の富	6
	(猫落語)	あいつのいない朝	6
	第10噺	鬼の面	7
	第11噺	猫の災難	7
	第12噺	猫の茶碗	7
	第13噺	猫の忠信	8
	第14噺	死神	8
	第15噺	天神山	9
	第16噺	馬の田楽	9
	(猫落語)	まくら	9
	第17噺	時うどん	10
	第18噺	蔵丁稚	10
	第19噺	寿限無	11
	第20噺	饅頭怖い	11
	第21噺	鼻ねじ	12
	第22噺	犬の目	12
	第23噺	七度狐	13
	第24噺	始末の極意	13
	第25噺	不動坊	14
	第26噺	目薬	14
	第27噺	住吉駕籠	14
	第28噺	猿後家	15
	第29噺	いたりきたり	15
	第30噺	狸賽	15
	第31噺	動物園	16
	第32噺	天狗裁き	16
	第33噺	べかこ	17
	第34噺	ろくろ首	17
	第35噺	京の茶漬け	18
	第36噺	くっしゃみ講釈	18
	第37噺	皿屋敷	19
	第38噺	つる	19
	第39噺	癩の合薬	20
	第40噺	代書	20
	第41噺	崇徳院	21
	第42噺	地獄八景亡者の戯れ	21
	第43噺	手水廻し	22
	第44噺	こんにやく問答	22
	第45噺	片棒	23
	第46噺	ねずみ	23
	第47噺	ねずみ穴	23
	第48噺	宿題	24
	第49噺	ゴルフ夜明け前	24
		(順番は製作順です。 お気に入りの噺は ありますでしょうか。)	
	ポストカード		25
5	落語土鈴番外編		26
6	あとがき		26



## はじめに

海老天たまこの作品を紹介するために、年1回のペースで「たまたまタイムス」という冊子を発行してきました。vol.7が追悼号という内容になったので、それで終わりにするつもりでしたが、今回はテーマを落語土鈴に絞って vol.8を発行することになりました。

奈良では春日大社の灯笼の数と鹿の数は数えられないといわれていましたが、本誌で取り上げようとする落語のネタの数も数えることが難しいでしょう。一説には500くらい、その中でよく演じられるのは300くらいといわれています。それに加えて新作落語・創作落語と呼ばれるのが次々と生み出されて古典落語並みに定着するものもあり、消えていくものもあり、ますます総数はわからなくなります。

その中で、土鈴作家・海老天たまこは好きなネタを100選んで土鈴にしようという試みを2012年から始めました。志半ばで病に倒れてしまいましたが、残された作品を通じて上方落語を楽しんでいただきたいと思います。

ここでご紹介する土鈴の中にお好きな噺はありますか？土鈴を見てネタを感じていただけるでしょうか？また、ご存じない噺の土鈴があれば、その噺を聴いてみるきっかけにしても良いでしょう。あるいは、もしお好きな噺の土鈴が見当たらないなら、海老天たまこが作ればどんな土鈴に仕上げただろうかと想像するのも楽しいかもしれません。

いずれにせよ、これらの土鈴を通じてもっと落語を楽しんでいただけると幸いです。

## 土鈴とは

鈴は古くには「須須」という字を当てたようです。その音色が美しく清らかで、涼やかなことからスズと呼ばれました。郷土玩具や縁起物、社寺の授与品として手にする土鈴。魔除けや開運・招福の願いも込められます。

形や色の面白さだけでなく、手にとって振ってみるとカラコロと素朴な音を立てるのも魅力です。

落語の世界と土鈴を結び付けたのはおそらく海老天たまこが最初だったと思います。



## 作家紹介 海老天たまこ 1961.06～2019.12

岡山県に生まれ、2012年より奈良県に移住。2002年に創部された備中張り子倶楽部で真鍋芳生氏に師事し張り子制作を学び、その後、土鈴を手掛ける。

岡山や奈良を題材にしたもの、猫・饅頭喰い・妖怪のキャラクタ、古事記、神話、古典落語をテーマにしたもの等、ユニークな視点で作家活動を進め、約12年の活動期間で1200点を超える土鈴や張り子の作品を残しました。

落語土鈴は「100作品完成したら本にしようね。」と言っていました。100作品は未達ですがこんな形で取りまとめてみました。所々に挿入したイラストや漫画も海老天たまこが描いたものです。



干支張り子面と  
(面は画像合成です。)



土鈴の絵付け中



できた作品はすぐに遊びに行っちゃうんだなあ。

## 第1噺

### 看板のピン

チョボイチで遊ぶ若い衆から景気付けに一つ胴を取ってもらいたいと頼まれた親分、てめえたちがそういうならと、壺皿の前に座る。一つの賽を無造作に筥に投げ入れると、上手の手から水が漏れたか、賽が壺皿の外にポロリとこぼれ、ピン(一の目)が出たまま「さあ、張んな」……このじじい、相当に毫碌してタガがゆるんだんだろう、こいつはタダでいただきとばかり、みんなピンに張る。  
**(若い衆)**「親分、本当にいいんですかい」  
**(親分)**「何を言いやがる。そう目がそろったら、看板のこのピンは、こうして片づけて……オレがみるところ、中は五だな」  
**(若い衆)**「あれっ!、これ看板だとよ!!」壺の中は、親分の言うとおりの五が出ていたので、一同唖然。

底面の鈴口にもご注目を!  
 「本当の賽の目はなんだろう?」と”?”の形にしました。



チョボイチとは一つのサイコロで出る目を一つ予測するサイコロ賭博の一種。子が出る目を予想してチップを張ってから親がサイコロを振るという単純なルールで、予測が当たれば賭け金の4倍または5倍を得る仕組みになっている。  
 落語の中では第30噺の「狸賽」にも出てくるサイコロ賭博です。サイコロ賭博ではサイコロを2個使う丁半も有名ですが「看板のピン」も「狸賽」もチョボイチでないと成り立たない噺です。

## 第2噺

### 頭山 (さくらんぼ)

ケチな男がサクラんぼを種ごと食べてしまったため、種が男の頭から芽を出して大きな桜の木になる。  
 近所の人たちは大喜びで、その頭を「頭山」と名づけて頭の上で花見の大騒ぎ、男は頭の上がうるさくて苛立ちのあまり桜の木を引き抜いてしまい、頭に大穴が開いた。  
 ところがこの穴に雨水がたまって大きな池になり、近所の人たちが船で魚釣りを始めだす始末、怒った男は自分の頭の池に身を投げて死んでしまいました。

片面には賑やかなお花見を、他方の面には男が池に飛び込む水しぶきを土鈴にしています。



鈴口は”入”の形にし、底に「大入」と表現しました。

土鈴の鈴口は長方形や円形など単純な形がほとんどですが、看板のピンの”?”やこの土鈴のように鈴口でも遊んでしまうのが海老天たまこの土鈴の一つの特徴です。他にも色々遊んでいる鈴口がありますのでお楽しみください。



カラー版も試作しましたがシュールすぎる場面にはモノトーンの方が似合うとしてモノトーンを選択しました。



### 第3 噺

### 牛ほめ (池田の牛ほめ)

叔父さんの家を褒めに行って、叔父さんの悩みである大黒柱の節穴を秋葉神社のお札で隠すというアイデアで小遣いを得た男、もうひと稼ぎと牛を褒めるお話です。

良い牛というのは「天角地眼一黒鹿頭耳小齒違(てんかくちがん いちこくろうとう じしやう はちごう)」というらしい。すなわち天角と言って角が真っ直ぐ天を向いて、地眼とは眼が地面を睨んでいる。一黒、黒一色で、鹿頭、首が鹿のように滑らか。耳が小さく、歯が互い違いグイチになっている。

このように教えられて叔父さんのところの牛を褒めていたのに牛は尻を向けて粗相をする。

叔父さんが恐縮していると、「心配しなはんな。ここにも秋葉はんのお札貼っときはなはれ。穴が隠れて『への用心』になります。」



### 第4 噺

### 鷺取り

鷺を捕まえて鳥屋に売りさばこうという男、思惑以上の鷺が捕れたために五重塔のてっぺんまで運ばれてしまうというお話ですが、鷺の前に先ずは雀を捕まえようとする。

男は伊丹の名物「こぼれ梅(味醂の絞り粕)」と「南京豆」を袋にいっぱい買ってきます。こぼれ梅を庭に撒いておくと雀が次々と寄ってきて食べます。それが味醂の絞り粕ですから、酔っ払ってどうしても眠くなる。そこで南京豆をまくと、雀たちは良い枕があったということで南京豆を枕に熟睡してしまう。そこを箒と塵取りでかき集めれば…。



雀がピーナツで寝るなら子猫も寝るかもしれない。寝かせてみると結構かわいい。土鈴「子猫の捕り方」



ピーナツの代わりに枕にしているのは倉敷銘菓「むらすゞめ」寝心地はbetterでしょう。

## 第5 噺

### 池田の猪買い

体が冷えるので、体の内から温めようとシシの身を買に行くことにします。

「ここで売ってるのは捕ってから日が経ってるよっていかんなあ。」北へ足を延ばして猪のたくさん捕れる池田へ行くことにします。

尋ね尋ねてようやくたどり着いた山獵師の六太夫さんのところ、捕れたてが良いと言って早速雪の中を獵に出ます。

「オンが良いかメンが良いか」、「大阪に帰るまで我慢できないんで六太夫さんのところで食べさせてくれる・・・？」あんまりうるさく言うので六太夫さんも思わず引き金を引いて「ダダ～～ン！」

ゴロツと猪がひっくり返った。それを見て

(男)「これ、新しいやろか？」

目の前で撃ったのにムカツときた六太夫さん、鉄砲を逆手に持って猪をどつくと気を失っていただけの猪が起き上がってスタスタ……

(六太夫)「そらあんなに新しい！」



## 第6 噺

### 蛇含草

蛇含草と云うのは、深山に棲むウワバミが餌として人間を呑み込んだ時、腹が張って苦しくなると消化薬として食べる草である。

ある夏の日、熊さんが大家の所へ行き、重箱一杯に入った餅を見て「オレなら全部食べられる」と言い出す。「食べられるものなら食べてみる」と大家が火鉢で焼く餅を次々に食べ始める。

餅を食い過ぎた熊さん、家に帰ったが腹が苦しくて苦しくて、その時人から貰った蛇含草を思い出し、これぞ腹ごなしの特効薬と、急いでその草を頬張る。しばらくして静かになると、部屋の中で餅が着物を着て座っていました。

蛇含草は単なる消化薬ではなく人間を溶かす薬草だったのです。



## 第7噺

### 蛸芝居

主人はもちろん番頭、丁稚、女中、乳母さんにいたるまで、家内中が揃ってみんなが芝居好き。出入りの魚屋まで加わって、芝居の真似事で大騒ぎです。

今日は酢ダコを食べようと、魚屋から買ったタコをにすり鉢を伏せて、丁稚の定吉に酢ダコに使う酢を買ってくるように命じ、主人が台所でタバコをふかしていると、、、。

一部始終を聞いていたタコが、「酢ダコで食べられてはたまらん！」と足を二本、すり鉢の下へグッと掛け、ポチポチ持ち上げ始めた、、、。

「台所の方が何だかうるさいなあ」と主人がそちらに目をやると、流石にこの店に買われたタコだけあって、何とタコが歌舞伎の泥棒の真似をして、台所から逃げようとしている所。



すり鉢を持ち上げて、見得を切っているタコの姿、目を大きく見開いた表情が可愛いですね。

## 第8噺

### 首提灯

東京落語では腕利きの田舎侍と江戸っ子のお話ですが、こちらは上方落語版。

立ち呑み屋で細かい持ち合わせがなく、近くの古道具屋で仕込み杖を買って金をくずした男。何とか切れ味を試してみたかった男はその夜、表の扉をわざと開けておいた。

案の定入って来た泥棒を仕込み杖でためし斬り。びっくりして逃げる泥棒の首が、なんだか横にずれる。戻しても戻しても、歩いているうちに首が横を向く。「あッ、首を斬られた!」

そこに火事が起こって通りを人が駆けてくる。提灯を前に差し出しながら「火事や、火事や!!」

あまりの人混みに、背中をドンと突かれた泥棒は、、、。切られた首を手にし、前に差し出しながら「火事や、火事や!!」



オチのところの 首の動かし方が難しい。

首を前に差し出しながら「火事や、火事や!!」



## 第9 噺

## 高津の富

とあるはやらない宿屋にやってきた男。泊まるなり「千両箱の使い道に困って漬物石に使っている」などと大いに吹きまくる・・・が実は文無し。

一方、宿の主人も人の良いもので、男の話をつっかり信用して、宿屋の副業として取り扱っている富くじの売れ残った最後の一枚を買ってくれるよう頼み込み、おまけに一番富が当たったら賞金千両の半分を貰う約束までした。

ところが、その富くじが一番富に当たったので大変、あまりの事態にその『似非金持ち』、宿へ帰ると、寒気がすると二階で蒲団をかぶって震えだす。

宿屋の親父も、一番富を知ってビックリ(@@)!!! 飛ぶように家に帰り大騒ぎ。「旦那様、早速お祝いを・・・」宿屋の親父は二階の座敷に下駄のまま駆け上がってきて客を起こそうと、パッと蒲団をめくると、客は雪駄をはいたまま寝ていました。

富籤1等当選というお目出度い噺、落語土鈴の中でも人気No.1の作品でした。



土鈴の表面は布団の柄で、目出度そうな招き猫・的に当たり矢・達磨等が描かれています。

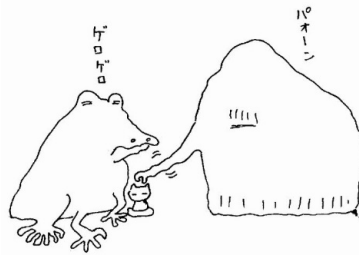
底面には当たりくじを握って震えている客。手にしたくじの番号は「子の千三百六十五番」です。

## 猫落語

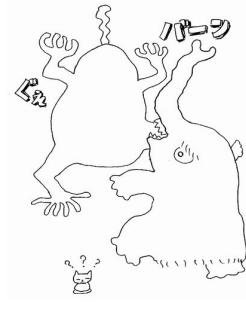
## あいつのいない朝



TVで「あいつのいない朝」やっていた。新作落語らしい。しかし、ニャンコはサトちゃんもケロちゃんも知らない世代。

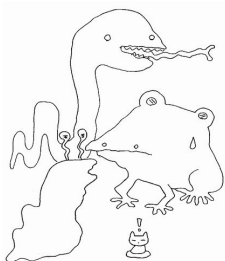


よくわからない。象はマンモスしか知らないし(マンモスは象か?)、カエルといえば四六のガマしか思い浮かばん。



このよくわからん二人が薬局の前で大喧嘩・・・

町が壊れちゃうぞう・・・



とりあえずガマだけはさんすくみでおとなしくさせて・・・



そうだ!!  
ゾウはバナナじゃバナナでおとなしくさせよう。  
めでたしめでたし。

本当は向かいどおしにある薬局に置かれた サトちゃん&ケロちゃんの仲良し喧嘩のお話なのにねえ。たまちゃんはきつとウトウトしながら聞いていたので妄想が広がって・・・

## 第10 噺 鬼の面

落語ファンでもあまり聞いたことのない噺と思いますが、主人公のおせつちゃん、大阪で子守奉公していますが池田の出身です。

そのおせつちゃん、お母さんがお多福さんにそっくりということで、お多福の面をお母さんと思って大切にしていました。それに気付いた旦那さんがちょっとした悪戯心からお多福の面を鬼の面に取り替えたところから大騒動が...

鬼の面を見た後のおせつちゃんの気持ちの動き、池田の家に戻ってきたおせつちゃんを迎えた両親の対応、自分の悪戯が原因だと判った旦那さんの気持ち、...なかなか良く出来た話です。

土鈴ではお多福の面と鬼の面を表裏に配置してみました、...

この鬼の面、怒っているんだか、笑っているんだか、困っているんだか、...?



## 第11 噺 猫の災難

文無しぶんなしの熊五郎、一杯やりたいと思っても、先立つものがない。そこで隣のかみさんから大きな鯛の頭と尻尾をもらった、猫の病気見舞いびょうきみまいにもらって、身を食べさせた残りだという。鯛の胴の所に布巾を掛けて置いておいて、とりあえず酒の肴は手に入ったと。

そこに訪れてきたのが兄貴分。鯛を見て身があると勘違いし、こんないのがあるのなら俺が酒を買ってくるからと大喜びで出かけていった。

さあ困ったのは熊さん、今さら猫のお余りとは言いにくい。酒を買って帰ってきた兄貴に切り身を猫に取られたと言い訳、それではしょうがないと鯛を買いに行った兄貴の留守中にお酒もいただいて、、、お酒も隣の猫が一升瓶を倒して全部こぼしたことにして...と

病気で寝ている猫に全ての罪を擦り付けたんだけれど、結局はバレちゃった。



鯛の胴体にかけている布巾は和紙で作られています。布巾をめくると、その下は骨だけになった鯛が。

この土鈴、噺のストーリーとは別に、猫のかわいさで人気がありました。土鈴というカテゴリでもやはり猫は強いということがよく分かりました。

## 第12 噺 猫の茶碗

地方回りの骨董屋さん、あるとき立ち寄った茶店でとんでもないお宝を発見する。茶店で飼われている猫の餌用の茶碗が、何と絵高麗梅鉢えたかまゐばちの茶碗という逸品だったのだ。

三百両の高値で売れると踏んだ男、その茶碗の真価などは知る由もなかろう茶店の亭主を言いくるめて、これを買叩こうと企む。「この猫がどうにも気に入った、是非わたしに引き取らせてはくれないか」ともちかけて、猫を三両で買い取ると、「食器が違つて餌も食いにくからう」と猫の茶碗も一緒に持ち去ろうとすると亭主は猫だけ渡して茶碗を取り戻す。

これで餌をやると猫が時々三両で売れると言って。



## 第13 噺 猫の忠信

稽古屋の師匠・お静と常吉の関係が噂になっている。次郎吉が稽古屋をのぞくと、丁度その二人がいちゃついている。次郎吉が常吉の女房に報告に行くと、やきもち焼きの女房は激高するが、次郎吉の「いまの今見てきた」との言葉に落ち着きを取り戻す。それもそのはず、その時、常吉は奥の部屋で寝ていた。

「エェ〜ッ、何で??」。次郎吉と常吉は二人で稽古屋へ、中をのぞいてみると、やっぱり二人はいちゃついている。

踏み込んで男を捕まえてみると・・・

ネコが常吉の姿に化けていたという。その理由は・・・



土鈴 狐忠信2種

落語のベースになっているのは『義経千本桜』の狐忠信です。

佐藤忠信は源義経に仕える忠実な家来ですが、『義経千本桜』に登場する忠信は実は鼓の皮にされた親狐を慕う子狐が化けており、その鼓を持つ静御前を守るというお話です。

## 第14 噺 死神

「死神が病人の足元にいるときはまだ寿命があるが、枕元の時は寿命が尽きていてダメだ」と死神から教わった男、医者を開業すると大成功。

ある時、謝礼の額に目がくらんで枕元の死神を計略で退散させたところ、さあ死神の怒るまいことか。

死神に気味の悪い地下室に連れ込まれたところ、そこには無数のロウソクが。これすべて人の寿命。男のはと見ると、もう燃え尽きる寸前。何とか助けてくれと泣いて頼むと、

ローソクが消える前に、別のうまくつなげればOK。つなごうとするが手が震えて・・・ああ消える・・・



人気ドラマ『昭和元禄落語心中』の中で名人・八雲が演じたことで落語ファン以外にも知られるようになった噺です。

ある落語イベントに出店していた時、一人の男の子がこの土鈴が気に入って買ってくれました。しかし、しばらくして男の子が戻ってきて、他の土鈴と取り換えてほしいと言いました。

「どうしたの？」

「一緒に来ていたおじいちゃんに見せたら、縁起悪いってしかられた。(x,x)」

……孫は良いセンスしてるのになあ。残念……



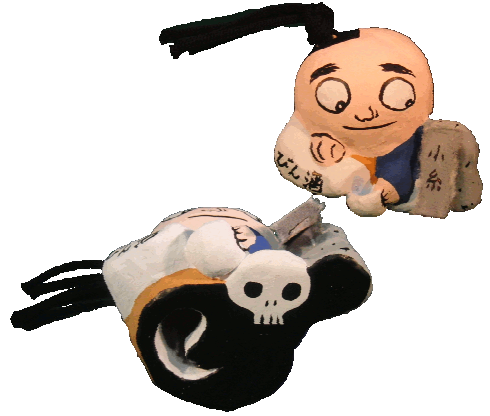
## 第15 噺 天神山

主人公の「変ちきの源助」、変ちき言うだけになんか変わって  
る。頭は半分剃って半分伸ばし、着物は上の方はひと  
え、腰の辺りがあわせ、裾の辺りが綿入れになってる四  
季の着物。足元は草履と高下駄を片っぽずつ履いてると  
いう具合。

春、人がみな花見に行くので、それではと墓見に、オマ  
ルに弁当を詰めてお酒は尿瓶に、、、万事こんな具合。  
適当なお墓を見つけて、それを相手にお酒を酌み交わ  
していると、偶然に舍利頭(しゃりこおべ)を見つけて持っ  
て帰ることに・・・その夜・・・

その舍利頭が幽霊になって出てきたので嫁さんにして  
しまう。幽霊の女房は金がかからなくて得だと、さすが変  
ちきの源助。

それを見つけた隣の男も真似をしようと・・・



## 第16 噺 馬の田楽

馬の背中に味噌樽を二つ括りつけて届けに来た馬方  
が表に馬を置いて家人を呼ぶが誰も出ない。小一時間  
経って戻ってみると馬がいないので近くで遊んでいた子  
供を問い詰めると、腹の下をくぐったり、尻尾の毛を抜い  
りしたので、馬は驚いて何処かに走って行ったという。

馬方は馬を探し求めて

(馬方)「おばあさん、走り馬を見なかったかね？」・・・

(馬方)「そこのだんな、馬を知らねえか？」・・・

(馬方)「背中に味噌付けた馬を知らねえかあ」・・・

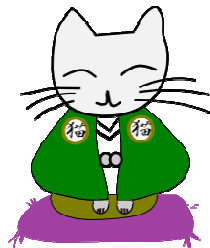
(聞かれた男)「味噌つけた馬だってえ、  
おらあ、この歳になるまで、  
馬の田楽は食ったこたあねえ」



土鈴の底の鈴口のところはおでんに  
なっています。

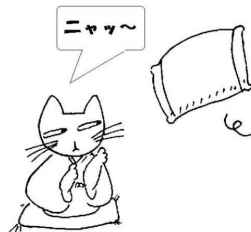
## 猫落語

### まくら



ええ～ 毎度ばかばかしいお笑いを一席。

猫が落語をいたします。  
「落語」ってのは、まずマクラから入ります。



そら 枕だ！



あつ、猫に枕は  
まずかった。  
寝ちゃったヨ

## 第17 噺

### 時うどん

知恵の働く兄貴分と少し足りない弟分が、夜道で屋台のうどん屋を見つけ、うどんを食べようとする。代金は16文だが、二人の持ち金を合わせても1文足りない。それでもかまわず兄貴分はうどんを注文し、自分だけうどんを食べ始める。弟分が遠慮がちにうどんをくれと袖を引いても、「待て待て」と言うだけ。ようやく、「そんなにこのうどん食いたいか」と渡してくれたどんぶりにはわずかなうどんが残っているだけ。勘定を払う時になると、「銭が細かいから数えながら渡す」と言って、「一、二、……七、八、今何時や」。うどん屋が「九つです」と言うと「十、十一、……十六。」歩きながら、1文足りなかったはずなのに、と不思議がる弟分だが、兄貴分からからくりを教えてもらおうと大喜びで、「わいも明日やってみよう」。

翌日、早くやってみたくて明るいうちから町に出た弟分は、昨夜とは別の屋台を見つけた。何もかも昨夜と同じにやりたくてたまらない。うどんを食べながら、「待て待て」とか「そんなにこのうどん食いたいか」と1人で言うので、「あんた、何か悪い霊でも付いてまんのか」と店主に気味悪がられたり、最後には、「何や、これだけしか残っとらん」とつぶやいて「あんたが食べなはったんや」とあきれられる。それでも、勘定を払う段になると大喜びで、一、二……七、八、今何時や、と聞いて、「四つです」。五、六、七、八、……。



土鈴の片面はうどんが売れてご機嫌で客の相手をしている1日目のうどん屋、反対側の片面は不審な客の行動に気味悪がっている2日目のうどん屋、その対比の面白さを土鈴に表現しました。底の面は鈴口を利用して一文銭を描きました。



左は亥年に作った干支土鈴で、イノシシ落語家・うどんやウリ坊師匠演じる「時うどん」です。上の土鈴では屋台全体を表現していますが、こちらはうどんを食べている仕草です。

26ページの番外編に載せた「笑福亭純瓶師匠の似顔絵土鈴」でも演じているのはこの場面です。

## 第18 噺

### 蔵丁稚

「仮名手本忠臣蔵」のうち、四段目の、判官切腹の場を題材にした噺です。

丁稚の定吉は、芝居狂。今日も使いに出たきり戻らないので、だんなはカンカン。

ついに旦那に蔵の中へ引きずっていかれ、ご飯も食べぬまま閉じ込められてしまった。

こうなれば芝居をして空腹を忘れようと、蔵の筆筒(たんす)を探すと、うまい具合に袴と三宝代わりの御膳。そして、旦那のご先祖が差してたという九寸五分まで探し出し、大声で芝居の真似を始めてしまった。

「カ弥、カ弥、由良助は」「いまだ参上、つかまつりませぬ」

「存上(そんじょう)で対面せで、無念なと伝えよ。いざご両所、お見届けくだされ」と短刀を腹へ。

そこへちようど女中が様子を見にきて、定吉が切腹すると勘違い。慌てて旦那に報告すると、旦那も「子供のことだから、腹がすいて変な料簡を起こしたんだろう!？」と仰天。

いくらなんでも、奉公人の命を奪うわけにはいかない。定吉に飯を届けようと調理場に飛び込み、じれったいからおひつ(飯櫃)をそのまま抱えて蔵へ。戸をガラガラガラガラ!!

(旦那)「御膳(御前)ッ!」(とおひつを差し出す)

(定吉)「蔵の内(内蔵助=由良助)でかア」

(旦那)「ハハア〜!」

(定吉)「待ちかねたア……」



## 第 19 噺

## 寿限無

ご存じ、「寿限無」です。

子供の幸せを願ってつけた長〜い名前、「寿限無 寿限無 五劫の摺り切れ 海砂利水魚の 水行末 雲来末 風来末 食う寝る所に住む所 藪柑子 ブラコウジ パイポ パイポ パイポの シューリングガン シューリングガンの グーリンダイ グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの 長久命の長助」、この名前が様々なトラブルを生みます。

「殴られてこぶを作った近所の子供が父親のところに行いつけに来る。やり取りの中で長い名前が繰り返されるうちに、こぶが引っ込んでしまった」、「学校に行くのに、朝友達が誘いに来て名前を呼ぶのが一苦勞。母親が名前を呼んで子供をおこすのも一苦勞。起こしている間に友達は学校が間に合わなくなるので先に行ってしまう。」とか。

今日は学校でテストの日。答案用紙が配られたので名前を書きましょう。寿限無 寿限無 五劫の摺り切れ…。名前を書いているうちにテスト時間が終わってしまいました。



## 第 20 噺

## 饅頭怖い

町内の者が集まり、各自嫌いなものを言いあっていく。「蜘蛛」「蛇」「蟻」などと言っている中にひとりの男、「いい若い者がそのようなものを怖がるとは情けない、自分は世の中に怖いものはない」と言う。本当に怖いものは無いのか、何度も念を押しているうちにしびしび「実は饅頭が怖い」と白状する。

その男、「饅頭の話をしているだけで気分が悪くなった」と言い出し、自宅に帰って寝てしまう。

そこで皆は「あいつは気に食わない男だから饅頭攻めにして怖がらせてやろう」と金を出し合い、饅頭をたくさん買いこんで男の家に投げ込む。すると目覚めた男は「ああ怖い、怖い。」などと言いながらも饅頭をむしゃむしゃ食べてしまった。

町内の者はどうも様子がおかしいと覗き見て一杯食わされたことに気付く。怒った皆が「本当のお前の怖いものは何だ!」と聞くと今度は「このへんで渋いお茶が一杯怖い!」。

この土鈴、鈴玉が三つ入っています。いろいろな饅頭をムシャムシャ食べている様子を音色で感じ取れれば幸いです。



薯蕷饅頭(じょうよまんじゅう)は竹の皮の座布団をひいています。竹の皮を半分までめくってみてください。落語の世界が広がります。



落語「饅頭怖い」では色々な饅頭が出てきます。そこで饅頭から連想して…色々な猫の「饅頭喰い人形」土鈴です。

薯蕷饅頭、たこ焼き、もみじ饅頭、三笠饅頭、他にも色々な「変わり饅頭喰い人形土鈴」を作りました。「たこ焼きも饅頭か!」と思われるかもしれませんが二つに割った酒徳利を持った鬼や、魂を持った悪魔、地球を持った宇宙人まで饅頭喰い人形にしたのがたまこワールドでした。



## 第21 噺

## 鼻ねじ

今年も桜の花が咲きました。そんな時期、隣同士の商家と学者先生の家の間で起こったトラブルのお話です。

発端は商家の桜が伸びてきたので学者が梯子をかけてポキンと折ったのに対して、小僧を使いに行って苦情を言うと、『塀ごしに隣の庭へ出た花は、ねじよが折ろがこちら次第』と一筆したためて追い返した。

そこで仕返しを、商家では旦那と番頭が相談して芸者、幫間をたくさん呼んで、花見のドンチャン騒ぎを始めます。学者先生、あまりの五月蠅さに講義もできず、また、あまりに楽しそうなので様子を見たくになりました。なんとか見たいと、塀の節穴から覗こうとするのを、こちらは待機の番頭、サツと穴をふさいでしまいます。

それではと、先生、梯子を持ち出して、塀越しに覗こうとするのを、番頭も梯子をかけ、右手に大きなヤットコを持って、学者先生の鼻を、ギューンと。

(学者)「痛あ～、何をする。」

(番頭)「今朝方の返歌でございます。

『塀ごしに隣の庭へ出た鼻は、ねじよが折ろがこちら次第』」



## 第22 噺

## 犬の目

目が悪くなって、医者に駆け込んだ男。  
「早く治すには、くり抜いて丸洗いしよう。」という診断。  
さっさと目玉をひっこ抜き、洗ってもとに戻そうとすると、  
水でふやけてはめ込めない。  
困って、元の大きさに縮むまで陰干しにしておくと、犬が  
目玉を食ってしまった。  
しかたがないので、罰として「犯犬」の目玉をくり抜き、男  
にはめ込むとぴったり。

今までのより遠目が利いてよかったが、

(患者)「先生、ダメです。これじゃ外に出られません」

(医者)「なぜ？」

(患者)「小便する時、自然に足が持ち上がります」

土鈴の底にはオシッコが描かれています。ところでこの土鈴の鈴口はどこでしょうか？？？……後ろ足を上げた犬のおちんちんが鈴口です。



目玉を抜くと寂しい！？  
いや、「目抜き通り」という言葉がある  
ように賑やかになるよ。  
土鈴だけど目玉が抜けます。



目玉が取れるのもマイブーム  
オリンピックイヤーに作った「金メダル招き猫」土鈴です。

## 第23 噺

### 七度狐

喜六と清八のコンビ、煮売屋で「イカの木の芽和え」を失敬したあと、空になったすり鉢を道端の草むら投げ捨てるとそこで寝ていた狐の頭にガ〜ン！！ここから狐の仕返しが始まります。

狐に騙されて山道に迷った喜六と清八。ようやく見つけた山寺で親切な尼さんに出会った。「何もありませんが、『ベチョタレ雑炊』でもありませんか。」  
「へえ。腹空いてますねん。ありがとうございますで。…」  
食べて見るとどうも変な味である。きけば、味噌代わりの赤土に体をホコホコ温める糞が入っているという奇妙な物。おまけにダシを取るためのイモリも出し忘れて残っている。これは口に合いません。……

この後、尼さんがお出かけして二人はお留守番。また一騒動が起こります。  
喜六と清八の身に次々と降りかかる災難。あれもこれも全て狐の仕返しでした。



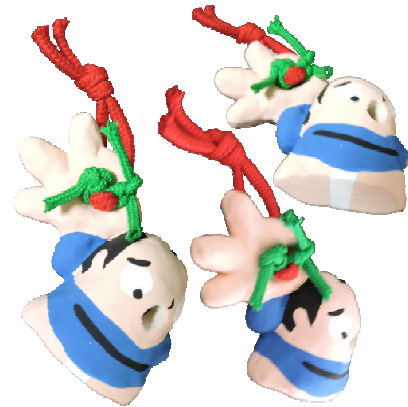
『ベチョタレ雑炊』を出してくれる親切な尼さん、実はいじわるな狐が化けていました。その一場面です。

## 第24 噺

### 始末の極意

あるケチを自認する男は、始末の指南を請うため、たびたび「吝嗇の大家」のもとを訪れている。男がある暑い日に吝嗇大家を訪ねると、大家は汗ひとつつかいていない。彼の頭上には、大きな石が細い糸で吊るしてあり、いつ落っこちてくるか、という恐怖感から涼しく感じてもらえる、と言う。

そのあと、1本の扇子を使って孫子の代まで伝える方法、鯉節を買わずにだしをとる方法、賽銭を節約する方法などの節約術の話が出た後、いよいよ始末の極意を習うことに。  
裏庭に出て、松の木に登り枝にぶら下がった後に……さてオチは？



そこでこの土鈴は松の枝にぶらさがった男、鈴紐で松の枝と松葉を表現しました。



最初に作ったのが左の土鈴、オチに関する指の形のインパクトがイマイチということで作りなおしたのが上の土鈴です。かわいさも少し増しています。

## 第25 噺 不動坊

講釈師・不動坊火焰の女房お滝さんは最近亭主が旅回りの途中で急にあの世へ行ったので、借金を結納代わりに肩代わりしてくれる相長屋の利吉のところに嫁入りした。利吉はうれしさを気もそぞろ。

一方、面白くないのは同じ長屋のやもめ連中。今夜二人がいちゃついているところへ不動坊の幽霊を出し、脅かして明日の朝には夫婦別れをさしちまおうと、ぶっそうな相談がまとまった。

幽霊役として不動坊と同業の講釈師で隣長屋に住む軽田胴齋を雇い、サラシの褌をつなぎ合わせて、利吉の家の天窓から吊り下げると…



ぶら下がった幽霊役の軽田胴齋を土鈴にしました。長〜い紐(サラシの褌)でぶら下げる楽しい土鈴です。

## 第26 噺 目薬



目がかすむので目薬を買ってきた男、処方箋を読もうとしたが元々字を読むのが苦手なうえに目がかすむので苦労する。「めしりにさすこと」…さて、何と書いてあるのか!? 一つ目の文字が銭湯の女湯のノレンに書いてある文字だと思いついた。「女しりにさすこと」⇒「女尻に注すこと」…女の尻に注すと自分の目に効くのか!?

こんな時に協力してくれるのは女房しかいないということで、嫌がる嫁さんを説得して…

女房の尻に注して男の目に効いたので結果オーライ。目薬はこのようにして注しましょう。

## 第27 噺 住吉駕籠

街道筋の駕籠かきは雲助、雲駕籠といわれて随分怖がられました。住吉街道の駕籠屋は町駕籠同様に安心して乗れたといえます。

ある日、住吉街道の駕籠屋が客引きに苦労していた。ゴミ捨て帰りの茶店の親爺に駕籠を勧めて叱られたり、乗る気のない夫婦ものからかわれたり、武士の問い合わせに早合点したり、酔っ払いに絡まれたり、…

そこに登場したのが気前の良い堂島の米相場師の旦那、喜んで乗せていこうとすると異常に重い、駕籠の中で話声もする、駕籠を下して中を見ると重いのも当然、旦那が二人乗っている。しかし、ゲンを担ぐ旦那衆は降りてくれず、このまま行けという。

バレたら仕方ない、開き直って駕籠の中で相撲の話をする。熱中しすぎて、籠の底が抜けてしまった。それでもゲンを担いで駕籠から降りずに中で歩く旦那たち、駕籠かきと合わせて4人で足が8本……。

これがホントの蜘蛛駕籠だ。





## 第28 噺 猿後家

顔が猿にそっくりな商家の後家さん。当人はひどく気にして、店では「サル」とつく言葉は禁句になっている。

この店に出入りしている太兵衛という男、後家さんに取り入り、機嫌を取るのがうまいので気に入られ、「大津絵の藤娘にそっくりです」などとべんちゃらを並べては酒、肴のご馳走を振舞われている。

ある日、伊勢参りから帰った太兵衛が店に来る。みやげ話をしている時、奈良の町の様子を話しているうちにうっかり「猿沢の池」と口をすべらせ失敗。

そこで番頭さんから入れ知恵をもらって美女尽くしでリベンジ。

(太兵衛)「おいえはんを昔の美女にたとえますと、日本では小野小町、照手姫か衣通姫(そとおりひめ)。唐土(もろこし)では、玄宗皇帝の思い者で・・・」

(後家さん)「玄宗皇帝の思い者で、一体、誰に似ているというのや。」

(太兵衛)「ようひひ(楊貴妃)に似てござります。」と口を滑らしてしくじった太兵衛、まるで「木から落ちたサル」、いえ、「木から落ちた猫同様でございます。」



手には小野小町の和歌の扇子、背中には木から落ちた猫が。

## 第29 噺 いたりきたり



枝雀落語の「いたりきたり」を題材にした土鈴です。

登場人物は二人、家で飼っている動物が話題となります。イタチに似た「いたりきたり」と「でたりはいたり」。なまこに似た「のらりくらり」、「ねたりおきたり」。

不思議な世界観の中で二人の会話が進んでいきます。聴き手の方も、話を聴いているうちに何か飼いたくなりました。都合のいいことに、飼い手の方でも手放したい生き物がありました。その生き物は「ねごたりかのたり(願ったり叶ったり)」。オチのところで名前が出てくるだけで何に似ているとか、どんな生き物とか、全く説明がありません。余韻を残して突然オチたことで、却ってストーリーのふくらみを感じます。

その不思議な世界観の表現、土鈴でチャレンジしてみました。噺のストーリーとの関連はご自由にイメージして下さい。

## 第30 噺 狸賽

子狸の恩返しのお噺。あるバクチ打ちの男に助けられた子狸、何にでも化けられるというので、サイコロに化けさせて男はチョボイチの賭博場へ。

強引に親になって、出したい目を言うと子狸が化けたサイコロはそのとおりの目を出して勝ち続け。

親が言った通りの目が出るので、周囲の男たちが疑いだして数字を言うなど釘を刺す。

それでも大丈夫、2の目を出したければ「上を向いて両目を開ける」、1の目を出したければ「逆立ちして尻の穴」と相変わらず調子が良い。

そこで最後の1勝負。狙い目は5。しまった5の目の出し方は聞いていなかった。そこで、「うーん、梅鉢の形だ。えー、まーるくなって、一つ真ん中であって。そう、梅鉢は天神さま。なッ。天神さまだよ、頼むぜッ」。男が壺ザルを開けると狸が冠かぶって、笏(しゃく)持って澄ましていた。



チョボイチについては第1 噺の「看板のピン」をご参照ください。

## 第31 噺 動物園

ゆっくり出勤して、力仕事でもなく、しゃべる必要もなく、昼食・昼寝付きで高給。こんな好条件な求人情報に飛びついて行ってみると仕事場は移動動物園。目玉展示の虎が死んだので、虎の皮をかぶって虎になりすますというお仕事。

空腹だった男は、子供客の持っているパンほしさに「パンくれ」と言ってしまうと不審がられたりしながらもなんとか虎の役割を果たしていた。

そこに突然、動物園のアナウンスが「虎とライオンの猛獣ショー」の開催を告げた。男が慌てふためいているのにも構わず、虎の檻の中にライオンが放たれて、男はパニックに。

さすがに百獣の王ライオンはうなり声を上げながらノッシノッシと虎に近づいてきて、虎の耳元で「心配するな、わしもライオンの代わりに雇われたんや」。



比較的新しい古典落語で上方落語の2代目 桂文之助(1859年 - 1930年4月16日)が外国に広まるジョークを落語に仕立てたといわれています。

桂枝雀はこの噺を英語落語にしていますが、これって逆輸出でしょうか。

他にも、笑福亭銀瓶の韓国語版、3代目桂歌之助のイタリア語版があるそうです。元々が海外のジョークなので外国人にも判りやすいのでしょうね。

## 第32 噺 天狗裁き

家でうたた寝をしていた八五郎、ブツブツ言ったりニヤニヤしているので何か面白い夢でも見ているのかと思って女房が揺り起こす。

(女房)「お前さん、どんな夢を見ていたんだい？」

八五郎は何も思い出せないので「夢は見えていなかった」と答えるが、女房は納得せず、隠し事をしているのだと疑う。

(八五郎)「そもそも夢は見えていないので話しようがない」、

(女房)「見たけど言いたくないんだろう。夫婦の間で隠し事をするなんて・・・。」と押し問答になり、夫婦喧嘩になってしまう。

その後、長屋の隣人、大家、奉行、が順々に仲裁に入り、やはりそれぞれが夢の話を聞きたがって話はだんだん大きくなり、ついに縛り上げられて奉行所の庭木に吊るされてしまう。

そこに大天狗が現れ、奉行所から助け出してくれたものの、やはり夢の話を聞きたがり、それを断ると大天狗は怒り出して八五郎の喉元につかみかかる。首筋に大天狗の長い爪が食い込み、八五郎は苦しみ悶える。

気が付くと八五郎は家で寝ていて、女房に揺り起こされていた。うなされていたようだ。

(女房)「お前さん、どんな夢を見ていたんだい？」





## 第 33 噺

### べかこ

泥丹坊堅丸という噺家、九州に巡業に来て、あちこちのお座敷や催し物で仕事をしていたところ、佐賀のお城から姫君の気鬱(きうつ)の病いを癒すため城へ来て面白い噺をしてもらいたいと言ってきた。

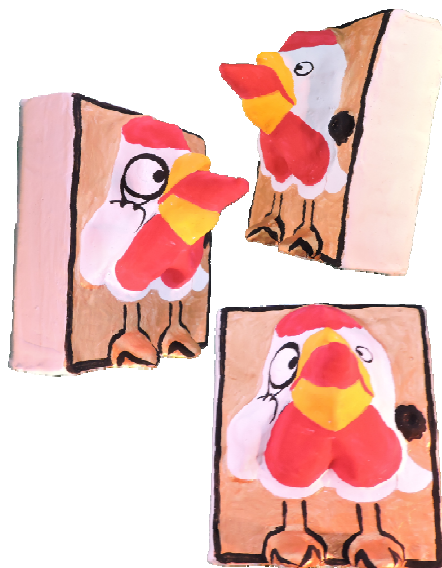
早速、お城に行くと「鶏(にわとり)の間」という部屋に案内され、その中で待っていると、腰元たちがが興味津々、覗きにきた。

ちょっと覗き見して思わず吹き出し、「うふ、わたしはこのような面白い顔をした男を見たことがありません。ちょうどまあ、狎(ちん)が茶を吹いたような顔」、「まあ、ホンにこれはちょうど、水桶の紐通しのような顔でございます、ちょ〜どあの鼻があぐらをかいている具合が…」、なんて散々な言いよう。

いたずら心を出した堅丸師匠、突然「べかこ〜！」と顔を突き出したから大変、「きゃあ〜！」、「べかこ、べっかあこ〜」、「きゃ〜」、バタバタ、バタバタと城内は大騒ぎとなった。

「何とけしからん噺家」と、哀れ堅丸師匠は召し取られてしまった。「明朝、鶏が鳴くまで縄目を解くことはあいならん。目の前に鶏の絵が描いてある、この鶏に鳴いてくれと頼むがよい」と、無茶なことを言われた。

堅丸が「お前も名人の手になる鶏やろ。わしのためにひとつ”コッカコー”と鳴いてくれ。どう〜ぞ、頼む〜！」と願うと、その祈りが通じたものか、絵の中から鶏が出て来た…  
鶏はバタバタ〜、バタバタ〜と羽ばたきをしたかと思うと、「べかこ」



「べかこ」は「アカンベ」と同じ意味で、見事に堅丸師匠の期待を裏切りました。また、この土鈴は2017年(平成29年)酉年の干支鈴としても飾られました。

## 第 34 噺

### ろくろ首

「資産家の娘で、器量もよい。そこに婿養子に行く気はないか。」と隠居さんから持ちかけられた男。好条件のウラを問いただすと毎晩午前2時ごろになると、首が、シューツ、と伸びるという。

気味悪がり、一度は渋るが、「夜中は寝さえすれば、伸びる首を見ずにすむだろう、また断るとこんな好条件を他人に取られるのも悔しい。」と思い直し、婿入りを決意する。

やがて婚礼ということになり、その夜、男はそばで眠る娘の首が気になり、寝付くことができない。やがて隣の娘の首がスーツ。男は、娘の首が伸びるのをはつきりと目撃してしまい、恐怖のあまり絶叫しながら屋敷を飛び出す。

男は隠居宅の戸を叩き、「首が伸びた」と叫びながら転がり込む。

(隠居)「伸びるのを承知で行ったのだろう」

(男)「まさか初日から伸びるなんて思わなかった」

(隠居)「芝居ではないのだから初日も千秋楽もないだろう。もう一度お屋敷に戻りなさい。お嬢さんがおまへの帰りを、今か今かと待っている」

(男)「怒っていないでしょうか。どんな風に待っているでしょうか」

(隠居)「首を長くして待っている」



長〜く伸びた首が鈴紐です。



首が張り子でユラユラ揺れます。

妖怪小学校シリーズ

泥面子風

妖怪好きの海老天たまこは落語土鈴以外でも色々なろくろ首土鈴を作りました。

## 第 35 噺 京の茶漬け

京都の町では用事を済ませて帰ろうとすると「あのオ、なんにもおまへんのどすけど、ちょっとお茶漬でも」と言うたらしい。だれもお茶漬けぐらいでは「ほならよべれます」と引き返さないし、言う方もまたあくまでお愛想で言うのだから、食べさす気はない。

ある大阪の男、何回も「ちょっとお茶漬でも」と言われるので、いっぺんこの茶漬を食べてやろうとわざわざ電車賃払って出かけてくる。昼食前をねらって顔見知りの家に入る。あいにく主人は留守で、その嫁さんが応対に出る。色々昼食を出すようになぞをかけるが、嫁はんは動じない。それもそのはず元々一膳分のごはんしかおひつにはないのだ。

男はしばらく亭主が帰ってくるのを待つが待ちきれず、帰ると告げると、そこまでずっと我慢してたのに、ついついいつもの癖で

(嫁さん)「何にもおまへんのどすけど、ちょっとお茶漬でも」と言ってしまう。男はこの言葉を言わしたいためにわざわざ来たので

(客の男)「さよか、えらいすんまへん」とすわり直す。

嫁はんはさんざん苦心してようようあつめたご飯一膳分にたっぷりお茶をかけ、漬け物をそえて出す。男はすぐに食べてしまって、もう一杯ほしいと思うが嫁はんはお代わりをしてくれない。そこで、

(客の男)「ああー、こんないい茶碗、大阪へみやげに五つほど買って帰りたい。このお茶碗は、どこでお求めになりました」と空の茶碗の底が見えるように差し出すと、嫁はんも負けずに空のおひつを突きだして、…

(嫁さん)「このおひつと一緒にその荒物屋で買いました」



## 第 36 噺 くっしゃみ講釈



「ムムツ、案にたがわず犬糞、犬糞。」と犬糞を踏んだ雪駄を講釈師・後藤一山(ごとういっさん)になすりつけられて、おまけに彼女にも逃げられた喜六が仕返しをするお話。

その一山先生に講釈の最中に恥をかかしてやろう考える。

そこで胡椒の粉を火鉢で燻べたら、エグイくっしゃみが出て講釈ができなくなるという。早速胡椒を買いに行ったけれど、生憎胡椒は品切れで代わりに買って来た唐辛子の粉を燻べた。その効果はバッチリ、煙が講釈師の鼻に入るとくっしゃみが止まらない。

喜六と参謀格の友人・清八は、さあ、仕返しチャンスとばかりに散々けなす。

ここで、仕返しが成功した喜六の喜びの歌…

(喜六)「オケラ、毛虫、ゲジ 蚊アに、ボウフリ、セミ、かわず♪、ヤンマ、チョウチョに キリギリスに ハータハタ、ブンプの背中はピーカピカ (^~^)」

(清八)「何ちゅうけったいな歌、歌ってんねん。」

(一山先生)「あいや、そこのお二人さん、他のお客様方はみな気の毒じゃと言うて 帰ってくれるのに、あなたがたは、なんぞ私に故障でもあるのですか(何か文句があるのですか)?」

(喜六)「胡椒がないから唐(トン)辛子の粉燻べたんや。」

## 第 37 噺

## 皿屋敷

姫路の土地の者には車屋敷として知られている古い屋敷、その井戸からお菊さんの幽霊が出て、皿の数を数えると聞き、みんなで行こうとします。ただし皿の数で九枚という声を聞くと、ガタガタ震え出して死んでしまうというので、七枚ぐらいで帰ることにした。

車屋敷で井戸を囲み、今か今かと待っていると、お菊さんが出てきて皿の数を読みだし、七枚で逃げて帰ってくると、何ともない。もとよりお菊さんはなかなかのべっぴんさん。リピータや遠方からの見物人もどんどん増えてきます。

ある日のこと、今日も大勢の見物人が詰めかけて、今か今かと待っていると、お菊さん、ズツ〜と出てまいります。ちょっと声が悪いと思うと、風邪をひいているとのこと。さて、皿の数を数え始めますが、七枚・八枚・九枚を超えて、とうとう十八枚まで読んでしまいます。見物の一人が文句を言うと、お菊さん「最前も言いましたよに風邪ひいてまっしゃろがな、今日、二日分読んでいてな、明日の晩はお休みしますの。」



四谷怪談のお岩さん、牡丹燈籠のお露さんと並んで、日本三大幽霊に数えられる皿屋敷のお菊さんです。姫路城にはお菊井戸があって今でも観光名所になっています。

## 第 38 噺

## つる

名前の由来というのは実に興味のあるもので、その蘊蓄だけでお話が出来上がります。今回は鳥の鶴がどうして「つる」と呼ばれるようになったかという話題です。

昔、鶴は「つる」と呼ばれずに「首長鳥」と呼ばれていました。

ある日、ひとりの老人が浜辺へ立って遥かな沖合いをば眺めてござった。その時、唐土(もろこし)の彼方から、まずこの首長鳥のオンとおぼしきものが一羽「ツ〜〜ツ」と飛んで来て、浜辺の松へ「ポイ」と止まった。

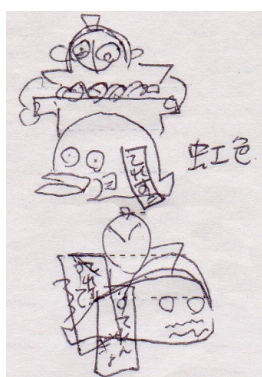
あとへさして、この首長鳥のメンとおぼしきものが「ル〜〜ツ」と来て、これも浜辺の松の木へ「ポイ」と止まった。これを見ていた老人が、ああ、これは首長鳥じゃと思っていたが、「ツル」じゃなということになった。

この由来を教えてもらった男、早速友達のところに行って、知ったかぶりをしようとしたのだが……



首長鳥の首は土鈴の紐です。

余談



落語土鈴は100作を目指して取り組んでいました。

49作で止まりましたが、まだまだアイデアを持っていたようです。

左は「テレスコ」のラフスケッチ、他には青菜、ん回し、チリテチン、愛宕山、宿替え、算段の平兵衛、胴乱の幸助、お玉牛、舟弁慶、らくだ、千両蜜柑……

どんな土鈴ができたでしょうか。想像するだけでも楽しいですね。



## 第39 噺 癩の合薬

外出中、突然奥様が癩を起こして倒れてしまった。普段、奥様は癩の合い薬のヤカンを舐めればすぐに治るのであったが持参していなかった。ビックリした女中は近くにヤカンは無いかと探し回ったが、丁度その時やかんが歩いてきた。頭髪が無くピカピカ光った、どう見てもヤカンの様な頭を持ったお武家様だった。

それを見た女中は仲間の止めるのも聞かず奥様の為とその武士の所に駆け寄り、「お願いでございます。主家の奥様が癩で倒れ、生憎く合い薬を持ち合わせていないので、お助け下さい」と、願った。武士は快く持ち合わせの薬を差し出したが、薬ではなく、ヤカンにそっくりなその頭を舐めさせて欲しいと懇願した。当然武士はカンカンで無礼討ちだと怒り、その連れ(家来)は笑い転げ、女中は泣いて、收拾がつかない。

「私は死を覚悟していますから、どうぞお願いします」、「そこまで言われれば、忠義なその方に免じて舐めさせよう」と言うことで、頭を差し出し舐めさせた。ペロペロ、ペロペロ舐めると、気が戻ってきた。

癩が治ったお礼にお名前とお屋敷を教えて欲しいという奥様に、恥の上塗りだから教えられないし、万一街中で会っても声を掛けるでないとキツく申し渡した。その後、右左に分かれてみると、武士の頭がヒリヒリと痛んだ。連れの者に見させると頭に歯形がくつきりと残っていた。連れの言うことには…

「キズは残っていますが、漏(も)るようなキズではありません」。

この家来の名前、噺の途中で「べくない!…笑うな!」、とか「べくない! いつまで笑っている!」とか出てくるのですが、変な名前、どんな字を書くのだろうかと思っていました。「可内(べくない)」と書くようです。さらにこれは固有名詞ではなくって武家の下僕の通称だそうです。



## 第40 噺 代書

代書屋に無筆男が履歴書の代筆を頼みに来た。就職のために必要だと教えられ、家中探したが無いので、向かいの家に借りに行ったら、そこにも無いので、やって来た。

本籍は…、現住所は…、名前は…、生年月日は…、学歴は…頓珍漢な受け答えで苦労しながら代書屋は履歴書を書き進んでいく。

(代書屋)「職歴だが、職歴ゆうても判らんやろうな。どんな商売をしてきた」、

(客の男)「言われると辛いな～。提灯行列の明けの年」、

(代書屋)「だったら明治37年、何をやった…」、

(客の男)「友達が『巴焼きの道具空いてるさかい、使えへんか』言うて貸してくれたんだ。借りに行ったら、錆びていたので、それをペーパーで…」、

(代書屋)「場所は?」、

(客の男)「玉造の駅前で、家賃が12円50銭」、

(代書屋)「家賃はいらない、『同市内玉造駅前において』…、巴焼では判らないだろうから、『饅頭商を営む』として、いつまでやった?」、

(客の男)「いや、やろう思ったけど、家賃高いから、やめた」、

(代書屋)「やったことだけ言いなさい。消すと紙が汚くなる。一行抹消。判子貸しなさい。訂正印だ。本当にやったのは?」

(客の男)「同じ年の12月に、夜店出を……冷たい北風がピューピュー吹いてくる。誰も買わない。アホらしなって、2時間でやめた」、

(代書屋)「…一行抹消。」…

(客の男)「判子はここに」。



露店営業人として履物  
優頼断と書、  
二行林京

この土鈴では客が持ってきたハンコは「松本」としました。これは枝雀師匠演じる「松本留五郎」を選んだからです。他には三代目桂春団治師匠演じる「河合浅次郎」さんがいます。これは師匠のお父さんの実名だそうです。また、この噺を作った四代目桂米團治師匠は、この客の名前を「田中彦次郎」としました。

## 第41 噺

## 崇徳院

熊さんが出入りの店の旦那から呼ばれ行くと、若旦那が具合が悪く寝込んでいる。訳を聞き出すと恋患いと言う。相手は高津さまにお参りに行った時、茶店で出会った水もたれるような綺麗な娘さん。別れ際に、「瀬をはやみ岩にせかる滝川の」と書いた紙を渡してくれた。下の句が「割れても末に逢はんとぞ思ふ」の崇徳院の歌で、いずれ再会し夫婦になりたいという意だと言う。

熊さんは旦那からその娘さんを探し出すように頼まれる。探し出しせば借金を棒引き、今住んでいる三軒長屋をくると約束だ。早速探しに出るが、見つからない。

女房から崇徳院の歌を大声を出して歩き、人のよく集まるフロ屋とか床屋へ行くように言われてまた探し始める。

(熊さん)「瀬をはやみ…」、「瀬をはやみ…」、  
ついにフロ屋を36軒、床屋を18軒回り、ふらふらになって夕方に朝と同じ床屋に入ってくる。

そこへお嬢さんが恋患いをし、崇徳院の歌を手がかりに相手を四国に探しに旅立つという男に出会う。お互いの店に来いと、もみ合っているうちに、床屋の鏡を割ってしまう。

(床屋)「そ〜ら、やっちゃった。鏡を割ってしまって、どうしてくれるんや」

(熊さん)「なに心配いらない、割れても末に買わんとぞ思う」



## 第42 噺

## 地獄八景亡者の戯れ

通して演じると1時間超である大ネタ「地獄八景亡者の戯れ」です。三途の川渡り、賽の河原、六道の辻、閻魔の庁などおなじみの地獄の風景が次々と登場する噺ですが、土鈴にしたのはサゲの部分です。

ここに登場したのが四人の亡者、それぞれ曲者ぞろいで地獄の鬼どもを困らせる。最終手段として人呑鬼に飲み込ませたが、人呑鬼の体内でも大暴れ、苦しすぎて人呑鬼も目に涙。

(人呑鬼)「こいつら腹の中で暴れやがって、もう便所で出してやろう…」と、便所へ駆け込んできぱり始めた。亡者は出されてはなるものかと人呑鬼の肛門の上で四人が井桁状になって、断固阻止。

(人呑鬼)「ウーン、ウーン、…あ〜ん、あ〜ん…」、  
ついに閻魔さんのところへ泣きついて、

(人呑鬼)「大王様、もう、このうえは、あんたを呑まなしゃあない」

(閻魔)「わしを呑んでどうするのじゃ」

(人呑鬼)「大王(大黄)呑んで、下してしまうのや」



大黄が下剤の一種だと知らない「どこが面白い？」というサゲなのですが、土鈴では切羽詰ってまさに閻魔さんを呑み込もうとする涙目の鬼さん、四人の亡者は底の鈴口で井桁状になって踏ん張っています。



大黄

木片のように見えますが昔から貴重な生薬で、奈良の正倉院にも中国から渡来した大黄が保存されています。(2020年の正倉院展に出展されていました。余談ですが2020年の正倉院展ではコロナ禍の影響で薬が色々出展されていました。)

大黄は基本的には下剤ですが、下痢の時はそれを止めるように働きます。現代で言えば抗生物質のようなものでしょうか。

## 第43 噺 手水廻し

ある大阪の商人、丹波の宿屋に一泊いたしまして、その翌朝という設定で噺が始まります。女中さん呼びまして、顔を洗おうと「ここへ手水(チョウズ)を廻してくれ」と頼んだところ、頼まれた宿屋側にはチョウズの意味が通じません。

結局、手水は長頭(チョウズ)＝長い頭だろうということになり、村一番の頭の長い男を呼んでその頭を廻させた。

客は早く手水を使いたいのので「早く早く」と急かす、男は「速く速く」とのリクエストに応じて頑張って長い頭を廻したので目を廻してしまった。

後日、宿屋の旦那さんは「ここへ手水を廻してくれ」の意味を確かめるために番頭さんを連れて大阪の宿に泊まりに来た。手水を頼んで運ばれて来たのは、大きな銅(あか)の金だらいに、並々といっぱいのお湯。そして、横には、塩と房楊枝。手水とはこれかということになりますが、何するもんや分かりません。飲み物だろうと理解して二人でようやく金だら一杯分を飲み干した時に女中さんがあと一人分の手水を運んできたので「後の一人前はお屋によべれます。」



土鈴は頭を廻しすぎて目を廻した長い頭の男、その背中には手水を苦勞して飲もうとしている旦那さんを描き、底の鈴口は「長」という字の一部になっています。

## 第44 噺 こんにやく問答

村の空き寺に諸国行脚の雲水の僧が問答に来たので、こんにやく屋の六兵衛さんが大和尚に化けて問答の相手をする事となった。

僧が何を問うても六兵衛が返事をしないので勝手に無言の行と勘違いして、身振り手振りで問答をしかける。三度の問答の結果、各々のポーズを各々勝手に解釈して問答の勝負がついてしまった。

(雲水の僧)「『三尊の弥陀は』との問いには『目の下にあり』との答え。いや恐れ入りました」

(六兵衛さん)「しみつたれ坊主め、ワシがこんにやく屋の親爺だと知っていて、こんにやくを300文に負けろって言うから、あかんべえをしたんだ」

六兵衛さんの背後では問答で僧が帰らなければ角塔婆で叩いて煮え湯を浴びせて追い返そうという準備をしています。



左は亥年に作った干支土鈴で、イノシシ落語家・こんにやくやボタン師匠演じる「こんにやく問答」です。

上の土鈴ではあかんべえをした場面ですが、こちらは「うちのこんにやくはこんなに大きい」と言っている場面です。



## 第45 噺 片棒

登場するのは赤螺屋吝兵衛(あかにしや・けちべえ)さんと3人の息子。ケチケチ蓄えた財産を誰に継がすかを思案し、自分が死んだときにどんな葬式をするかという問いで3人の息子を試そうとする。

長男は超豪華に、次男は超粋に、二人の答えを聞いて吝兵衛さんはあきれてショック死状態。次は三男の順番、

(吝兵衛)「おい、もうおまえだけが頼りだ。兄貴たちの馬鹿野郎とは違うだろうな、」

(三男)「当然です。あんなのは言語道断、正気の沙汰じゃありません」……とやっと、まとものが出てきた。

(三男)「早桶は菜漬けの樽の悪いので十分。樽には荒縄を掛けて、天秤棒で差しにないにしますが、人を頼むと金がかかりますから、あたしが片棒を担ぎます。ただ、後の片棒がいません」

(吝兵衛)「なに、心配するな。オレが出て担ぐ」



## 第46 噺 ねずみ

「鼠屋」という小さな宿屋に泊まった左甚五郎、向かいの「虎屋」との因縁話を聞いて、その晩、精魂込めて一匹の小さな鼠を彫り上げた。

さすが名人の作った木彫りの鼠、チョロチョロ動き回るのでみんなビックリ、鼠を見たさに「鼠屋」には客が押し寄せた。

逆に「虎屋」には閑古鳥が鳴き始めたので、大きな木彫りの虎を作って鼠を睨ませたところ、大きな虎の威力に怯えたのか鼠はピタッと動かなくなりました。

それを聞いて左甚五郎が鼠屋に戻って来た、

(左甚五郎)「おい、ネズミ、俺はお前を彫る時に魂を打ち込んで彫り上げたつもりだけど、お前はあんな虎がそんなに恐いのか」と聞くと

(ネズミ)「えっ？あれは虎ですか。てっきり猫と思いました」



土鈴は猫だと思って怯えて固まってしまったネズミとトラだと判って安心して元気になったネズミを対照的に作りました。

## 第47 噺 ねずみ穴



「ねずみ穴」という噺のクライマックスで蔵に開けられた「ねずみ穴」を塞いでおかなかったためにもらい火で蔵が焼け落ちてしまいます。主人公の人生が暗転する印象的な場面です。

この土鈴では噺のストーリーとは異なり、「ねずみ穴」を塞ぎました。これで安心、ネズミさんも喜んでいきます。

ネズミは十二支の最初の「干支頭(えとがしら)」です。この土鈴は2020年の干支・庚子(かのえね)にあわせてネズミに関連した落語土鈴として作成されました。

## 第48 噺

## 宿題 桂三枝(六代 桂文枝) 作

池の周りに鶴と亀が集まっています。  
頭の数16、足の数は44本、  
さて鶴は何羽、亀は何匹?????  
こんな算数の宿題に大苦戦、お父さんも巻き込まれて悩んでしまいます。そんな大騒動を描いた創作落語、文枝師匠の代表作と思います。

土鈴の上面は男の子が宿題帳を開いた勉強机になっていますが、服の色は池の水を連想させます。土鈴の側面は池の土手になっています。そこには鶴が10羽、亀が6匹描かれて、宿題の答えが出ています。

絵付けを引き受けていただいた富士山笑呼さんの細かな筆づかい、すごいです。良い作品に仕上げていただきました。

文枝師匠の公式ブログでも紹介いただきました。こちらをご覧ください。



六代・桂文枝師匠のリクエストによって作り始めました。うまくいけば文枝師匠の独演会等での販売も見込まれたでしょうけれど型までできた段階で海老天たまこは作業できなくなりました。仕上げは友人で張り子仲間の富士山笑呼さんをお願いしました。

## 第49 噺

## ゴルフ夜明け前 桂三枝(六代 桂文枝) 作

桂三枝(現・六代桂文枝)師匠の創作落語で1983年に文化庁芸術祭大賞を受賞した作品です。

土鈴の前面では坂本竜馬と中岡慎太郎、それに新選組の近藤勇と沖田総司が仲良くゴルフをしています。

それから時が経って、土鈴の背面では鳥羽・伏見の戦いに敗れて逃げる羽目に陥った新撰組、逃げる途中で近藤勇が通りかかったのはかつて坂本龍馬とゴルフをした広場。思い出した近藤勇がゴルフのまねごとをしているところに敵軍の大砲の弾が飛んできた。

危ない!!! でも大丈夫だ。敵の大砲はOBでだいぶ外れている。

絵付けを引き受けていただいた富士山笑呼さん、似顔絵には苦心されたでしょうね。坂本龍馬などそっくりです。

文枝師匠の公式ブログでも紹介いただきました。こちらをご覧ください。

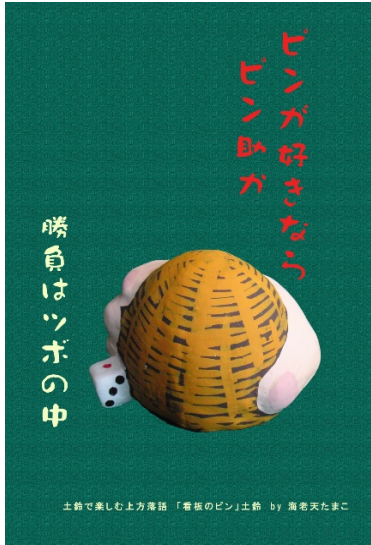


前作の「宿題」同様、六代・桂文枝師匠のリクエストによって作り始めました作品です。これも仕上げは富士山笑呼さんをお願いしました。



ポストカード

落語土鈴をポストカードにしてみました。



第1噺 看板のピン



第2噺 頭山



第4噺 鷺取り



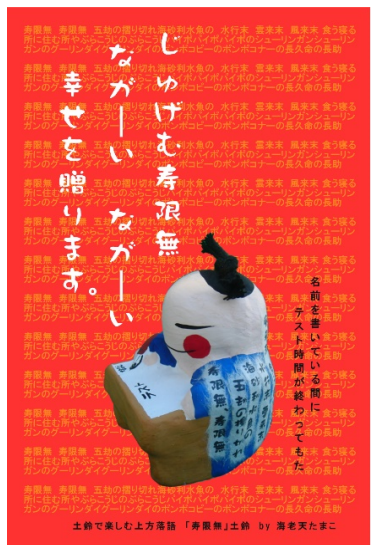
第7噺 蛸芝居



第9噺 高津の富



第11噺 猫の災難



第19噺 寿限無



第33噺 べかこ



第34噺 ろくろ首

## 番外編

落語ネタではないけれど、落語に関する土鈴たちです。



上方落語の定席  
天満天神・繁昌亭です。



奈良の造り酒屋さん。  
文化財の書院での落語会です。



落語喫茶・古々粹亭で  
大笑い！！



笑福亭純瓶師匠の  
似顔絵土鈴です。



天満天神繁昌亭のマス  
コット『小梅亭てんてん』  
ちゃんです



噺家さんの定紋土鈴で  
す。  
最初は泥面子として作り  
ましたが少しだけ土鈴に  
しました。

第17噺・時うどん、第44  
噺・こんにやく問答でも干  
支鈴を作りましたが、こ  
ちらは未年に作った羊福  
亭マトン師匠です。



## あとがき

落語土鈴を買って下さるお客様を見ていると大別して3つのパターンがあるようです。

- ①好きな落語ネタがあって、そのネタの土鈴を見つけたから。
- ②聴いたことのない噺だけれど、土鈴を見て面白そうだから土鈴を買って帰って噺を聴きたい。
- ③落語とは無関係に、気に入った土鈴だから。

いずれにせよ、落語土鈴を楽しんでいただけたようです。

本誌はたまたまタイムスvol.8として作成しましたが、バックナンバーvol.1～vol.7もホームページでご覧いただけますのでご活用ください。

URLはこちらです。 <http://from-yamato.sakura.ne.jp/tama/index.html>

海老天たまこ 土鈴

検索



本誌に関するお問い合わせは メール: miyosida917@gmail.com 吉田 満 までお願いします。

2021年3月発行

非売品